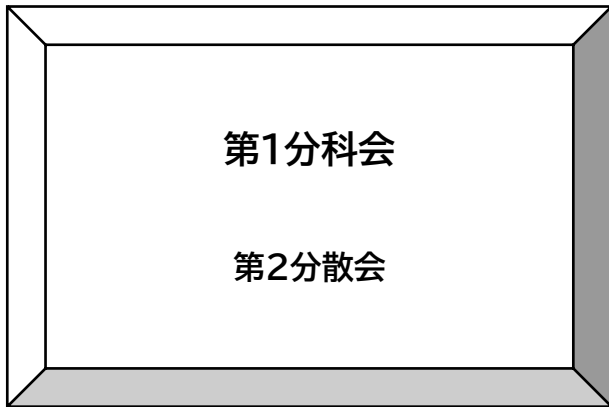




I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、地元協力者から次のように呼び掛けられた。「人権教育は人と人をつなぐ教育である。そのために、私たちは、目の前にいる子どもたち一人ひとりと丁寧に関わることから始めなければならない。家庭を訪ね、一人ひとりと語り合い、子どものくらしを知ることで、子どもたちの持つさまざまな暮らしの現実や思いが見えてくる。その見えてきたくらしの現実を、学級の課題と重ね、教師自らを語りながら、様々な授業実践を行っていくことが、「同和」教育を人権教育としてつないでいくことになる。ここにいる皆さんとも、本日、明日の分散会での交流を通して差別を無くす「なかま」としてつながっていこう。」

この後、討議の柱として討議課題①～⑥のうち、特に①～③を大きな柱とすることが確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑦

私を支えているもの（高知県人教）

－主な質疑と意見－

熊本 先生ちゃんと教えてくれるがでね。という意味を知りたい。

報告者 ちゃんとわかっているんでしょうね。という意味です。

熊本 Aさんが「支えてくれてありがとうございます。」と発言したことについて、これまで支えてくれないという意味だった？というイメージか？

また「前と全然違う」の違う意味とは？

報告者 1点目は、正直に言うと自分がAさんを支えられたのかはわからないが、寄せ書きの言葉で、Aさんだけが「支えてくれて」という言葉を使っていた。周りのまねではなく、自分の言葉で書いてくれた。本当に思っ書いてくれたことが嬉しかった。1年間で一番関わり話した子どもだった。自

分の目標を見つけて頑張ろうとする姿が見られ、後半から変化が見られた。2点目は、おそらく自分自身を俯瞰してみたときに、厳しい教師と思っているが、いけないことはいけないという言葉が先に来ってしまう。以前担任した子供の居場所を失くしてしまうという失敗があった。けれど、Aさんを担任して、同じことを繰り返してはいけないという思いを持つようになった。変わらなくてはいけないと思うようになった。その先生が変わったというのは、子どもとの向き合い方という部分ではないかと考えている。

奈良 人権学習への強い思いを感じた。Bさんとの出会いに関して、自分も識字学級に通う方との出会いがあった。Bさんとの出会いや生き方から学ばれたことは？

報告者 Bさんが、「差別はあるがで先生。」と教えてくれた。部落問題を見ようとしなければ見えないことを学んだ。

山口 Bさんとの出会いで教材ができ、どんなことを学べたか？新しい学校に異動されて部落史学習をされたようだが、Bさんに関する教材も作成されているか。

報告者 識字学級の教材は、以前からあった。新しくではない。校区の中で識字学級があるので、そのBさんに関する教材を作りたいと思った。識字学級の映像を取り、ナレーションを入れビデオ教材を作った。学校は部落史学習を系統立てて行っているの、歴史を学んで最後に総合で識字学級のことを入れることにした。次の学校では特にできていなかった。6年生を持つことも何度もないので、昨年度と、今年度ようやく取り組むことができた。

熊本 保護者から電話がかかったことについて、保護者からどんな話が聞けたのか、またAさんのことに関して、どんなことが聞けたのか。

報告者 バスケットボールのルールの話だった。Aさんが納得していないことを伝えてくれなかったのが気になった。どうせ聞いてくれないというオーラを出していたんだろう。そこがいけなかった。まず聞かなくてはいけないという思いになった。まず話を聞く態度ではなかったことを謝った。Aさんと話をきちんとすること、聞く場を作ろうとした。

三重 Bさんの言葉の裏にある差別の現実について。Aさんの態度の裏にある差別の現実とは何だったのか。先生はそれに対してどんな実践をされたのか。

報告者 Aさんの課題と差別の問題は同じではな

いと捉えている。はっきり答えられない。

三重 そういう振る舞いになってしまっている要因は何だったのかについて、聞きたかった。

報告者 推察だが、6年生になるまで、支援配慮をする必要のある児童の一人として挙がっていた。家庭の中でも寂しい思いをされていたのではないかという風に推察する。

兵庫 Aさんの背景について教えてください。しんどさの背景を知りたい。Bさんについても立場を教えてください。教科書無償運動については取り上げられているか？

熊本 「2組の文化やき」の言葉について。どうしてAさんはこの言葉を言ったのか？クラスが変わったことの根拠を教えてください。

報告者 現任校は地区を有していない学校である。家庭環境は厳しい。学力も大変厳しい。Bさんは被差別部落出身であると語られている。教科書無償運動の授業は必ずやっている。Aさんの言葉については、よいこと。貯金については、集めるとイベントができる。Aさんはイベントをしたいと思っていた。ほかの子よりもその思いが強かった。みんなと集めてつながりたいという思いがあった。その思いからだろう。周りの子たちの雰囲気だが、目に見えてトラブルが減っていった。Aさんの言動が変わっていったことも同じ時期だった。

－報告2－⑤

「お母さん、今日先生来ると？」（長崎県人教）

－主な質疑と意見－

熊本 家庭訪問が大事だと感じた。Aさんが不登校になった要因は。

熊本 2つくらいの要因を言われたが、Aさんの休みが増えてきたときに、こうしておけばと思うことはあったか。

三重 不登校になられた兄との関連はどのようなことがあったか。

報告者 Aさんの不登校の明確な理由は、本人もよくわからないと言っていた。楽しみにしていたのは昼休みと給食だった。学習への楽しみは持ていなかった。兄が不登校となった時に「なぜ、自分だけ行かなくてはいけないのか。」と言い、その時にうまく返すことができなかった。登校への意欲が持ていなかったときに、私の姿が「学校に来させようとする嫌な人」というイメージだったのではないか。もっとAさんが「何をしたいのか」を聞き取るべきだった。兄の不登校の理由は分からない。年

の離れた姉がいるが、別に暮らしている。

大阪 自分の気持ちを表現できず、無気力な子どもへどう対応されているか。学力保障への先生の悩みはどんなものか。

香川 報告者以外の先生の関わりについて教えてください。

報告者 無気力な子どもには、その子の「好き」から攻めるようにしている。そのために家庭訪問を大切にしている。何に興味があるかを聞き取って対応している。学力保障については私自身悩んでいる。まず学習へ向かうエネルギーを先にためようとしている。今の目の前の子には何が大切かを考えている。その先に進学の問題もあるが、教科の面白さを伝えながら、いつか学習へのスイッチが入るのではないかと考えている。ほかの先生との関連としては、特別支援コーディネーターの先生が関係機関を紹介してくれた。管理職の先生は、保護者との面談で、厳しく伝えなくてはいけないことを伝えてくれた。

大阪 報告にある「Aさんにとっての自分らしさ」とは。Aさんの願いとは。先生とAさんは安心できる関係だったと思うが、周りの子どもたちとのつながりやその後の関わりについて教えてください。

熊本 Aさんのことについて中学校の先生はどのように関わられているか。

報告者 Aさんの自分らしさについて、スポーツをしたり体を動かしたり、笑顔で過ごすことと考えている。Aさんの「こうなりたい」ということは聞いていない。Aさんは、中学2年生で転校することになった。1年生時は入学式に出てからは行けていないようだ。

三重 先生の取組は持続可能か。小学校6年間の関わりはできても、その後のこれからは何が残せるか。

報告者 目の前の子どもたちとは、今の関わりはできるが、何が残せるかその子が学びたいと思ったときに、選択の一つになればいいと考えている。いつでも話に来ていいよという存在になっているといいと考えている。

三重 中1で不登校になった生徒を2年生で担任している。家庭訪問を繰り返し、少しずつ登校できるようになってきた。報告のAさん自体が自分のことをどうなりたいか理解し、学校に行ったときに誰が寄り添ってくれるか分かれば少しずつ学校に向いたのではないか。

報告者 Aさんは自分の思いを話すことが難しか

った。分からないといえずに、「好かんもん」で終わらせようとする傾向にあった。なかなかAさんの思いをくみ取ることができなかった。もっとたくさん聞いておけばよかったと報告を書く中で後悔した。大人の後押しは、家庭でもあった。

－報告3－⑥

そんなお父さんを誇りに思っています。

(熊本県人教)

－主な質疑と意見－

奈良 大阪出身です。報告者がバス会社でどんな差別と出会ったのか。またどんなことをその場で言われたのか。どんな気持ちで、また教員を目指したのか。

報告者 バス会社でのことは差し控えさせてもらいたい。差別はする側の問題だから、周りが差別をしない存在だと証明しないといけない。ひかりも差別落書きを見て泣き崩れた。支部長さんと一緒に落書きを見に行った時、私はその場にいなかった。後で連絡を聞いて、ひかりが言った言葉が「先生なんでおってくれなかったと？」と言われた。くやしかった。いつかひかりが差別と出会ったときに、立ち向かってほしい。そのために、その力を得るために義務教育の中で、経験させたい。学年部の先生と差別落書きを許さないという学習をしたいと相談した。みんな協力してくれた。実は、落書きを発見したのは大津北中の子どもたちだった。中学生も怖い思いをした。このままじゃいけないと思った。授業で取り上げた際、はるかも授業中震え始めた。その手を握ったのは、落書きを発見した中学生だった。みんなで学ぶ必要性を強く感じた。

熊本 報告者のお母さんの言葉は書いてあるが、お父さんの言葉はないか？もしくは生き方で感じたことなどあれば。

報告者 父は言葉が荒く、親戚との集まりではムードメーカー。私にかけける言葉は少なかった。父の姿を見て思うのは、思ったことをすぐに口に出す、正直な人。ありのままの姿、そこから、子どもたちと接するときもありのままに。母の身辺調査については、父は知らなかったと話した。父もよく知らずに部落差別をする、発言する場面もあった。

福岡 ひかりさんは解放子ども会で出自をどう捉えているか。出身を明かしたいとひかりが言ったときに先生はどう感じた？周りの支部や学校はどう感じた？

報告者 ひかりさんは、部落出身であることをあまり気にせず話してくれる。素敵な親子関係だなと感じている。下の兄弟がいて、その子たちがどこまで認識しているかはわからない。自分のことを伝える際、校訓「人自然誇れる北中」、学級目標「ありのまま・自然体」がつながったと感じた。学校としては、先生方に事前に知らせた。学習会にも積極的に参加してくれていた。ひかりのことを理解できていた。支部については、なんとも言えない。

熊本 卒業した後もレポートの2人は先生とつながり、先生を目指している。同和対策特別措置法が出たときに本当は行政に学んでほしかった。その時の学びがないために「同和」という言葉が独り歩きました。お互いが勉強をしていなかった。大津の支部の取り組みとしては、まずは教育だと思った。学校と話し合った。そのために町の教育委員会と話し合った。大津町は同和教育に関してはどこにも負けないと思っている。母が「同和」という言葉で切ったのは、差別意識ではない。原因を作ったのは行政であると考えている。

○1日目の総括討論

熊本 高知のレポートについて。Aさんのことで推察という言葉があった。推察とは？Bさんの「ちゃんと教えてくれるがでね」の聞き返しはされたか？

報告者 聞き返しはしていない。ちゃんと教えるということを反芻していた。その時の正直な思いとしては、緊張していた。その時の自分は、話をしてもらうことを、約束を取り付けなくては、という思いが強かった。Bさんの背景についてまでは深く考えていなかった。あるとき、Bさんから「ツンとしていた先生が柔らかくなった」と言われた。「ちゃんと教えてくれるがでね」は、本気で人権教育をやってくれるんですか？という思いが入っていたのだろうと今は思う。前任校のときは、一生懸命だった。やらなくては、という思いだった。Bさんからの手紙があるので、別の先生が代読。

兵庫 進路公開をする際、勝手なアウトティングはしてはいけない。周りへの指導、学習も必要。部落問題を知らない先生も増えてきている。目に見えないように巧妙な差別が増えてきている。これから先生方、引き続き部落問題を解消するような学習を頑張ってもらいたい。

熊本 長年大津で働いている。支部の方々先生方と関わってもらい人権学習を学んできた。人権教育は毎日の営みの中にある。発表会や人権学習

だけではない。自分のことを偽らずに話せるようになる。ぜひ、若い先生方にも知っておいてほしい。

協力者 3つのレポートとも子どものためにという思いが見られた。大切なのは自分自身が反差別の立ち位置に立って考えること。教師だけではなく、周りの子どもたちも。進路の時にどう語っていくかも総括で確認された。毎日の営みの中で人権は学んでいくものだ確認出来た。

〇1日目のまとめ

高知県からは、「私を支えているもの～『出会い』が『生き方』になる～」という報告がありました。これまでの「言うことをきかす」やり方の間違いに気づき、言動が乱暴な A さんから信頼されていないと気づいた報告者は、もう一度「しんどい子を学級の柱にする」という同和教育から学んだことに立ち返ります。A さんやクラスの子どもたちの変容と同時に報告者もまた変わっていきました。また、報告者は転任先で、今までは当たり前のように行ってきた同和教育が当たり前ではなかったのだということに気づきます。そして、識字学級の B さんの「先生、ちゃんと教えてくれるがだね」という言葉の本当の意味ともう一度向き合う中で、自分は本気で同和教育に取り組んでいるかを問い直していかれました。これまで自分事として向き合っていなかったと気づかれた報告者は、部落がなくてもどの学校でもやらないといけないと取り組まれていきます。討論の中で、会場からの質問に一つ一つ真摯に答える報告者の姿が印象的でした。まさに同和教育に本気で向き合う姿を報告の中で見せていただいたように思います。

長崎県からは、「お母さん、今日も来とると？」という報告をしていただきました。3つの学校が統合し、新しい小学校としてスタートした学校に A さんがいました。はじめは友だちと仲良く過ごしていた A さんですが、学習に意欲が持てず、兄の不登校をきっかけに、5月の連休明けから完全に登校しなくなりました。報告者は、毎週家庭訪問をし、A さんに関わる中で、4月当初から笑顔で過ごしていた A さんを勝手に「大丈夫だろう」と思い込み、A さんとのつながりを作れていなかったことに気づいていきます。学校のカリキュラムやコミュニケーション能力をつけなければという価値観を転換し、A さんのペースで A さんのやりたいと思うことを「学び」だと捉え、A さんらしくいられることを大切にしながら目標に向かったこと、保護者の思いも大切に

したこと、それら全てが A さんにとっては学校に行けていなくても安心できる居場所であったはずで、討論の中で不登校の子に何ができるか考えながら地道に関わり、信頼できる大人として寄り添い続けることの大切さが確かめられました。ただ一方で、不登校は、学習権の保障、学力保障を奪うだけでなく、仲間作りの場や、自身の立場性を学ぶ場を失うことになります。子どもが学校に来ていないことを諦めず、不登校がどのような意味を持つのか、私たちの教育課題を問い続けなければなりません。

熊本県からは、「そんなお父さんを誇りに思っています～ひかりとはるかの出会いを通して～」という報告をしていただきました。退職、転職をし、もう一度教員になった報告者は、同和教育の実践を再スタートします。校種変更をし、大津北中学校で担任した1年生の子どもたちの中に、ひかりさんがいました。中 2 になった年、ひかりさんや報告者は、町の差別落書きと向き合うことになります。落書きを見に行き、泣き崩れるひかりさんの隣で支えるはるかさん。ひかりさんは、「先生、なんでおってくれなかったと。」と報告者は告げられます。差別落書きを許さない集団を作らないといけないと、人権学習で落書きを取り上げる実践をすることに決めます。そしてひかりさんは、信じられる仲間がいることで安心し、中 3 の進路公開では自分のことを語り、部落差別と向き合ってきた父への誇りを語ります。この報告、討論の中で、私たちは厳しい差別の現実を前に、反差別の立ち位置に立てているかどうか、反差別の仲間づくりをすることの大切さを痛感します。報告者は自分一人で作った報告ではないとおっしゃいました。反差別のつながりを子どもたちにも、そして私たちの中にも作っていかねばなりません。

－報告4－⑧

「依存」から「自立」へ（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

熊本 スミレさんらが飛び出したときの対応として、別の教員に任せたのはなぜか。また、その際の先生の気持ちは。規則を守ることを強制したことで、子どもたちの気持ちが離れていったと話されたが、規則を守らせることについてどう思われたか。

報告者 はじめは、自分が行っていたが、話していく中で1時間、2時間となる中で、一旦別の先生にお願いをするしかなくなった。放課後に必ず話をす

るようにした。いろんな先生に関わってもらえることもメリットだと考えていた。規則を守らせるということに関しては、理由も付け加えて話した。危険だから。規則にもいろいろあり、朝ピアスをして来ないという規則も伝えていた。ルールも時代によって変わってくるものだと考えているが、危ないからなど明確な根拠があるものに関しては、理由とともに規則を守らせるように話してきた。

奈良 クラスづくりとして、クラス全体で継続して取り組まれたことはあるか。また、レイナさんが変わったきっかけは何だと考えるか。

報告者 クラスづくりのために、まず「つながり」を作らなくてはいけないと思った。同じメンバーだけの関わりではなく、新しい関わりづくりもしたかった。レイナさんが変わったきっかけについては、居場所が増えたことだと考えている。レイナさんが卒業した後も小学校によく遊びに来ることから、小学校も1つの居場所になったんだと考えている。

大阪 レイナさんの家庭背景、家庭との連携について教えてほしい。また、周りの子がレイナさんをどう見ていたのか、頼れる相手がいたのか。

三重 依存できたのは、孤立ではなく、各々二人のつながりができたのはなぜか。

熊本 関わりについて、特定の子とだけ関わり、別の子と関われないという子どももいる。「依存」について報告者は、どう捉えられているか。

報告者 保護者とのかわりについて、電話連絡や家庭訪問を4年生のころからよくしていた。母、本人、妹の3人で過ごしていたが、自傷行為は母の関わりを求めてのことだった。電話や家庭訪問でよく母と話をし、伝えるべきことは伝え、一緒に育てていきましょうということは共有できていた。レイナさんは人と関わることは好きなので、つながることはできていたが、悪い言い方での「依存」をしているように見えた。つながりを作るが、新しいつながりを作ると、前のつながりとは切れている状態だった。どの子も大切にしてほしいということを伝えてレイナさんも変わっていった。

－報告5－⑨

真のつながりをめざして（奈良県人教）

－主な質疑と意見－

奈良 子どもが教室の中で思いを出せているのかいつも考えている。課題もふくめてお互いが理解しあうことについて、思うことは？音楽のやり取りでBはどんな様子だったか。

報告者 ありのまま、いいところも悪いところも含めて。課題も含めて出し合いたいと考えている。おかしいところにも気づく目も鍛えていきたい。苦手なところ、課題もみんなで乗り越えていきたいと考えている。音楽のトラブル時のBについては、Aの気持ちを伝えている。BはAの気持ちが知れて嬉しそうだった。BはAの課題はクラス全体の課題だという素地ができていた。その素地を作ったのはBの母親。

香川 Aの家庭訪問の際のことについて、学校への不信感はあった？Bとつながり始めたときの父親の様子はどうだったのか？Bがトラウマじみたことを受けているが、そのことへの配慮があったか。

熊本 Aの父が分厚いメモを持っておられた背景は何なのか。なぜそこまで。

報告者 Aの保護者は、Aが学校に言えていないので、学校にはよく電話連絡が来ていた。メモは証拠という感覚。メモに残した意味は、父親自身がAを守ってあげたいの一心。Aが言えないのであれば父親が代わりに言ってあげるという思いがあった。もし嫌なことがあって学校行きたくないのであれば、行かなくてもいいというスタンスだった。父親自身も学校に行けない時期があったと聞いている。不信感というわけではなさそうに思う。保護者の協力については、週末の学級通信で学校での様子を伝えるとともに、大事にしてほしいことも伝えている。懇談会などでも伝えている。AとBの親同士はつながりたいと思っていない。Bの保護者は、学童のトラブルの時に目にしている。その時に子どもを守ってやれなかったことを後悔していると懇談で話されていた。学校でのことは、子どもたちや学校で解決させたいという思いを持たれていて、その感覚の違いがあり、お互いに相いれない部分がある。BとAにはつながってほしいという思いがある。

熊本 A「Bちゃんと仲良くなりたい。でも父親が…」という場面はあらゆる差別にかかわる。そのことに関して、Aの保護者に伝えたことは？

報告者 音楽のトラブルの件もそうだが、Aは親に言わないでという。どこの部分は伝えてほしくないの？どうして？と問うことはある。伝えていい部分については保護者に伝えている。Bと仲良くなりたいという部分は伝えていいというので伝えたが、「父親が…」の部分は言わないでほしいということだったので、Aの想いを尊重し、伝えなかった。父親の反応としては、音楽のトラブルに関してはAさ

んがいけなかったよね。BさんはAさんのことを思ってくれたのにね。という反応だった。父親も距離を置けと言いながらも、Aがしたことがいけないときには、きちんと叱ってくれるんだと分かった。この1年で一番話した保護者だったので、私の想いも伝わっていたと思う。

〇2日目の総括討論

大阪 「だと思う。じゃないか」ではなく、子どもたちの思いを見抜くことが大事だと思った。本校でも人との出会いを大事にしている。心を動かす出会いがあれば子どもたちは自分の思いを書いたり言ったりする。プラスの出会いを、展望を持つような出会いをすることが大切だ。マジョリティ、マイノリティの立場の違いに気づかず傷つけることもある。しっかり向き合うことが大切。

協力者 人との出会いを仕組んでいく実践が必要だ。

熊本 昨日今日と話を聞きながら就学前で何ができるか考えた。言葉、文字をもたない子どもたちが絵を描いたことで、仕草で見とったことをもとに対話をして、子どもの思いを見取っていく。以前不安定な子どもがいて、その子が家族のコップを描いた。園長にそのことを伝え、コップの中に何が入っているか聞いた？と返され、ハッとした。コップの中にはお酒が入っていた。飲まずにはいられない家庭環境にあることが分かった。保護者の思いを知ることとても大切だと気付かされた。

協力者 見ようとしなければ見えない。差別というのはそういうもの。言葉だけでなく表情でも、声にならない声を聴かなければならない。

奈良 伝え合う。語り合うということが大切。5人の報告に共通していたことは、子どもたちの思いを知らなければならない、ということ。自分に対して返すことの大事さも実感した。私は2年生16人を担任しているが、1年時に落ち着きがなかった。講師を2年、本校でそのまま新採となった先生が1学期で退職。その後のクラスを担任したが、4、5月に気になる子がいて、その子のよいところ、直したほうが良いところを本人にも周りにも伝えていくことが大切だと思い日々実践をしている。休み時間になると、私の近くに来てくれる学年で、関わりを持って接すると近づいてきてくれる学級。音楽の時間に騒がしくなることが増え、音楽の時間に飛び出すことがあった。生活つづり方を実践していて、音楽の時間のことをつづってほしいという思い

で、書かせてみた。黙々とどの子ども書いていく。後日、共有の時間を取った。飛び出した子たちは、冷静に自分たちのことを振り返ることができた。騒がしくした子たちは自分たちの何がなかったかを振り返ることができた。気になっていた子は自分のことを客観的に見て、自分の行動について振り返ることができた。人はすぐには変われるのではないが、日々子どもたちの思いを受けて、それを返していくことで子どもたちを成長させたい。

熊本 私が住んでいる地区で熊本地震が起きた。最近、近くの家が増えてきて子どもの数も増えている。地元では寝た子を起こすな論がいまだにある。私はそれじゃいけないと思っている。一番問題視していることは、子ども同士の分断が起きるのではないかということ。部落差別についての理解が追いついていない状態で、変な部落差別を受けるのではないかと危惧している。自分たちは何をすればいいか。子どもたちが知らぬ間に、部落差別を芽生えさせていくような心配をしている。それぞれの立場で、子どもたちにどう対応をすればいいのか学びに来た。自分がどういう立場であろうが子どもたちにまっすぐ育ってほしいという思いの人たちがこの場に集まっているはず。先生方には頑張ってもらいたい。

熊本 初任で行った学習会で、聞いた「この場に産んだ親を恨んで生きる子どもにするわけにはいかんのですよ、先生。」という言葉。自分自身がそういう人間だった。クラスの中で自分たちのことを語る取り組みを始めた。学習会があって、その日は遊べないのは僕たちの地区が、差別があって、その差別を無くすために親が闘ってきた。そのことを学ばなくてはいけないと子どもたちが語った。本当のことを語ると、感想はたくさん書いてくる。自分の言葉で書いてくる。嬉しかった。熊本県の発表を聞きながら、ひかるさんのお父さんのことを思い出した。熊本の報告者だからできたのではなく、すべての教育者にやってほしい。報告者のレポートに学ばなければならない。この先生なら言えるという関係を作れば、子どもたちは救われる。進路公開をして分かったこととして「誰一人いい加減に生きてきた人がいないことが分かった。この1年間を忘れない」と書いた子がいた。隣の子を尊敬しなくちゃいけない。人を傷つけるような子たちを育ててはいけません。今、一番学校教育で必要なのは、同和教育、人権学習ではないか。

山口 差別落書きを発見した部活の子。泣き崩れ

た部落の子。反差別の集団作りを熊本での実践で聞くことができた。

差別はがきが家に届き、発見したのは子どもだった。見せたことを悔いた。彼女は社会に対する不安、部落に対する不安を受けた。学校の先生が社会でしっかり学ばせてくれた。子どもは学びについて周りの子たちの姿について、家庭で話してくれた。一生懸命学ぶ姿を見て、少しずつ安心感を持つことができた。中3の人権作文で自分のルーツ、差別はがきのことを書いた。「今の周りの子たちなら大丈夫」と言った。全校の前で発表することになった。彼女は前日の夜に不安になり涙した。違う小学校からくる子たちが受け入れてくれるか不安だった。みんなの前で発表したとき、涙で読めないところがあった。その時「〇〇がんばれ！」という友だちの声が上がった。発表した日の夜、「発表してよかった。」と言った。これから先、成長していく中でその発表を聞いていた子たちは差別をするような大人にならないだろう。

これから移住してくる人が増えてきているという話題があったが、「部落差別のあった地区」ではなく「反差別の地区」という新たな捉え方をしてはどうか。

熊本 保護者の立場で聞かせてもらった。学習会に参加した子どものころ。先生たちともぶつかることがあった。子どもの数だけ対応もいろいろだと思う。差別も数多くある。本人たちがどう学ぶかが大切だと思う。ひかりの告白に対して、猛反対した。ひかり自身がどれだけ理解しているのか分からなかった。大人として社会の中で生活している、子どもたちも学校に来ている時点で社会に出ている。差別の現実を目の当たりにしたときに、反差別の立場で生きていってほしいと願っている。娘が高校に進学したときに、仲良くなった子が前田先生の教え子だった。共通点に喜んでいて。出会いに感謝。今では、社会人になって成長したと思うのが、介護士として利用者の方から戦争の話を聞くことがすごく勉強になると話している。子どもには自分を出せる、自分を作ってほしい、社会に出て行って自分自身を作る、それを共感しあえる仲間と出会い、一緒に過ごしていくという経験をしてほしい。学校のなかで、学んでほしい。いろんな子どもたちを教えてきた分、きちんと学んだ子どもたちが大人になった時の姿を楽しみにしてほしい。

高知 部落のないところはあるが、差別のないところはない。確かにそうだなと感じた。どのレポート

も差別の現実がある。自分の教育実践と重なる部分があった。高知の報告者と同僚で前任校で勤務していた。別の学校へ行っても地域教材を起こしたり、同和問題の学習を続けられている。識字学級のBさんの存在は源流になっている。源流を潮流にすべく頑張っていかなければいけない。熊本の先生の話。新幹線で鹿児島へ行かれたこと。まさに靴減らし。子どもが手を握った瞬間の話、素敵だと思った。とても救われたことだろう。そんな子どもたちと一緒に過ごしたいなと感じた。高島さんのレポートで、関係という言葉が散りばめられていた。関係を築こうという思いが感じられた。修学旅行の場面で変化が見られたということで、自分の手を離れたときに子どもたちが学ぶ瞬間があるなと改めて学ばせてもらった。子どもたちに任せていくことで自然と学んでいくこともよくある。任せきりでない自分もいて、差別を助長させているのかもしれないと考えさせられた。問い直すのは自分だなと考えさせられた。

報告者の感想

高知 Bさんから学んだことを伝えられていなかった。学んだことが行動を伴うものである。部落差別を本気で無くしたいと思った。転任校で同和問題を一緒に取り組んでくれる同僚に出会えなかった。私はここで仲間を増やしていこうと思った。なぜそう思ったかという、Bさんが好きだから。好きな人が差別をされるのは嫌だからというシンプルな理由だと改めて思うようになった。クラスでも同じように考えてくれる子どもを育てていきたい。

長崎 この場でたくさんの方とつながり、Aさんに伝えたいと思った。反差別の力を子どもたちにつけたいと改めて学ばせてもらった。報告の経験もだが、フロアのやり取り、報告をきいて学びが深まった。

熊本 全国という舞台で緊張したが、いろんな立場の方がいらっしゃることを改めて考え、子どもたちとの出会いって奇跡的だなと思った。悔いの残らない出会いにしたい。サッカーの指導をしていて、「なんばしよとや」と言ってしまうことがあるが、何に気づき、何を判断し、どう行動するかを見取る必要があると感じた。こちらが気づこうとしなくちゃ行けないこともあるなと思った。これからもたくさんの気づきを大切にしていきたい。

大阪 このレポートを報告する際に、レイナに会う予感がしていた。先週の木曜日に会い、一緒にスミ

レがいた。今、依存関係にある様子だった。レイナを中心に据えてレポートを書いて振り返ることができた。報告には不安もあったが、子どものことを考え寄り添う機会をもらった。尊敬する先輩が「人権教育が教育の核だよ」と教えられた。修学旅行の場面、子どもたちの可能性をこちらが手を差し伸べることで狭めているのかもしれないと感じた。特別支援の肢体不自由の子と今年関わっているが、私が離れたときに、周りの子が集まってくることがあった。任せることと放任は違うので、場面によって子どもに任せる場面も作っていききたい。

奈良 困っているけど言えないような集団ではなく、困ったときに手を握ってくれる存在を作るような集団作りをしたい。自分らしく人権学習に取り組み、子どもたちが将来、自分の言ったことが繋がっていくような種まき、水やりをしていきたい。

2日目のまとめ

大阪市からは『『依存』から『自立』へ』という報告をしていただきました。特定の友だちに依存し、仲良くなつてはトラブルになり、また一人になってしまうことを繰り返すレイナさんは不安定で、自傷行為をしたり教室から飛び出したりしていました。そんなレイナさんに報告者は、生活態度をきちんとすること、いろいろな友だちやおとなとつなげることによって、弱さを見せていい、たくさんの人に頼っていいと、「依存先や居場所を増やす」といった取組をされました。それは、レイナさんにだけ焦点を当てて始めた取組みから、みんなでやることや人を傷つけず、差別せず、大切にすることの価値を伝える取組に変わっていきました。レイナさんにとっての安心したつながりを作る取組は、多様な背景を持つみんなにとっても安心できるつながりになりました。友だちと安心してつながれない子どもたちの不安定さはどう向き合っていくのか。私たちは不安定な子どもの「人とのつながり方」を丁寧に読み解き、そこに見えてくる弱さや不安、自信のなさなどにどんな暮らしの背景や社会の不合理さがあるのかを見取っていかねばなりません。「自立」とは、自分の弱さや自信のなさを認識し、向き合って、そのことを友だちやおとなに開いていくこと、そして自分の主体をつくり直していくことではないでしょうか。自分の弱さに潰れそうなときは「助けて」と言っている。そんなやりとりの積み重ねが「自立」になっていく、一人で立たなくてもいい、つながりながら立てばいい、そんなことが確認された

報告でした。また、子どもたちが安心できるつながりをつくっていくために、どんな人権学習を組み込んでいくのかも考えていかなければなりません。

奈良県からは、「真のつながりをめざして」という報告をしていただきました。自分の思いを表現することが苦手で、表情や態度に出てしまうAさんは、お互いのできないことばかりを指摘し合ってしまうBさんとの関係がよくありませんでした。Aさんの父親も「Bとは距離を置きなさい」とAさんに伝えていました。報告者は一方で友だち関係に悩んでいたこともつかんでいけます。そこで、AさんとBさんをしっかりとつないでいく仲間づくりの取組が始まります。お互いのいいところを探すことがお互いの存在を認め合うことや、自分のことを見つめ直すことにつながっていきます。また報告者は、AさんとBさんの対話も大切に、気持ちを伝え合うことを通して、二人をつないでいけました。学習で分からないことがあっても「大丈夫」と応えていたAさんが、他でもないBさんに「Bちゃん、ここ教えてほしいねんけど」と心を開き、ありのままの姿で関わるできるようになっていきました。討論では、報告の中の「いいところ探し」「対話」「真のつながり」の中身が問われていきました。報告者は、楽しい事だけでなく、本当の思いやしんどさ、弱さも伝えられること、受け止めることが真のつながりだと言われました。Aさんのお父さんの分厚いメモ帳にも、Bさんのお母さんの「Bを守ってやれなかった」という涙にも、子どもを守りたいという思いがありました。報告者は、AさんとBさんの学校でのつながりを伝え、少しずつ親同士のつながりを作っていることも聞かせていただきました。会場からは「Bさんと仲良くなりたいけど、お父さんが『距離を置け』って言うし」という言葉は部落差別にもつながるのではないか、どうAさんとBさんの保護者に伝えていくかが、あらゆる差別の解決になるのではないかという意見もいただきました。